

日本医歯薬アカデミーに期待する役割

小林 義典

私は、日本学術会議の最初の改革で発足した第 13 期第七部口腔機能学研連委員として、研連活動に携わりました。その後、咬合学に繋がる 17 学会の推薦選挙で第 18、19 期第七部会員兼咬合学研連委員長に選出され、21 世紀の健康、医療、福祉で不可欠な咀嚼機能と咬合に関する情報を日本学術会議の報告書に纏め、学会とマスメディアを介して社会へ徹底的に伝達しました。また、歯科学の他の 2 研連委員会と合同で 76 学会が参加した日本歯学系学会協議会を設立し、歯科学のアカデミー機能を発揮できるようにしました。さらに、日本学術会議の組織・制度のあり方を検討する常置委員として、第 20 期に実施される停年制と co-optation 制による日本学術会議の 2 回目の改革について審議しました。

その間、第 18 期が始動して程無く、第 13 期から活発化した研連活動を支援するために、日本学術会議との間で相互補完することを主な役割として設立されたという日本医歯薬アカデミーの第 3 代会長に就任された岡田晃第 15 期第七部長が、感染症、我国の医学と医療の将来、生命科学の進歩と生命倫理などの時宜を得た第七部と共催の講演会やシンポジウムを全国各地で開催され、大成功に導かれました。懇親会でも、持ち前のリーダーシップと明るさで、皆を大いに楽しませてくれました。特に、夏部会は圧巻で、OB として奥様と参加された故・三輪史郎第 15、16 期会員が、「皆が何事にも年齢や役職に関係なく、対等に胸襟を開いて語り合い、最高に楽しく、皆の心が一つになり、奥様方も回を重ねる度に常連になった」と絶賛されましたように、日本学術会議で最も活気に満ちた学術イベントに築き上げられました。実際に、日本医歯薬アカデミーが支援した第 17～19 期のシンポジウムの開催数は、第七部が最多を占め、殊に第 18、19 期で最盛期を迎え、優秀な会員や OB と親交させていただき、最高の勉強の場になりました。これも、偏にアカデミーの役員と賛助会員の御支援と御協力の賜物と深く感謝しております。

幸か不幸か、私は、2 回目の改革による第 20 期以降、旧第七部の領域が生命科学の第二部に括られた約 10 年間で第 21、22 期第二部連携会員かつ日本医歯薬アカデミーの使い走りとして、視てきました。残念ながら、シンポジウムやアカデミーと共催の学術イベントの開催数は、減少の一途を辿り、また旧第七部のほぼ全会員が参加する親交の場でもあったアカデミー主催の懇親会へ参加する第二部会員は、常に僅少で、最近では遂に 1 名となってしまい、将来が甚だ気懸りです。

これは、多分に会員が OB を「停年制」という言葉によって無意識に第一線から退いた過去あるいは守旧派の人として疎隔してしまうのではないかと推察されます。そこで、「停年制」に変え、「任期制」に留めてみたらいかがでしょうか。

言葉尻の問題は、アカデミーの名称についても同様で、第 20 期総会後の懇親会において、生活環境が専門の第二部会員から、「医歯薬という限局された名称に躊躇感と疎外感を覚えた」と指摘されました。確かに、21 世紀の本邦の重要課題が「生き甲斐にも配慮した健康長寿」であることからすれば、必要な範囲を具体的に網羅した「日本健康・医療・福祉アカデミー」というような名称に改名する検討をされてはいかがでしょうか。

さらに、比較的若年の新会員と話をしますと、改革の意義の認識の程度、例えば co-optation 制を往々にして学協会や OB とは全く関係なく推薦されたと強調されすぎる嫌いが感じられます。

この風潮は、第 20 期から改革の旗振り役の黒川清第 19、20 期日本学術会議会長が改革の目玉の 1 つに挙げられていた医歯薬アカデミー機能の確立に少なからず影響を及ぼし、主目的であるサイエンス・フォー・ソサイエティを滞らせることになると言えます。詰り、これからの国際社会で期待されている社会科学、工学、医学系を代表する組織のうち、日本医歯薬アカデミーが本邦のこの分野でのアカデミー機能の確立し、新生学術会議とどのように連携を確立していくかが重要な課題であるからです（医歯薬アカデミーNEWS. No. 9,2005）。

今後、国民にとって最も重要な健康・医療・福祉で、施術する側から拘らう第二部の多くの会員は、サイエンスに加え、親切心、慈しむ心、障害者や弱者を思い遣るまたは労る心、奉仕の心等の人間愛を益々求められることが必至と言えますが、OB やアカデミー役員とのコミュニケーションを図ることさえ儘ならぬようでは、国民の負託に応えることが難しくなります。そうならないように、OB や日本医歯薬アカデミー役員との繰り返しの丁寧な対話が必要なのではないのでしょうか。

いずれにせよ、真の学術団体として、「楽しく集えて学べる」ことを期待します。

●プロフィール

小林 義典

日本医歯薬アカデミー理事

日本学術会議第 18・19 期第七部会員・咬合学研連委員会委員長

日本学術会議第 21・22 期第二部連携会員

日本歯科大学名誉教授